世界一美しいぼくの村

小林 豊 文・絵

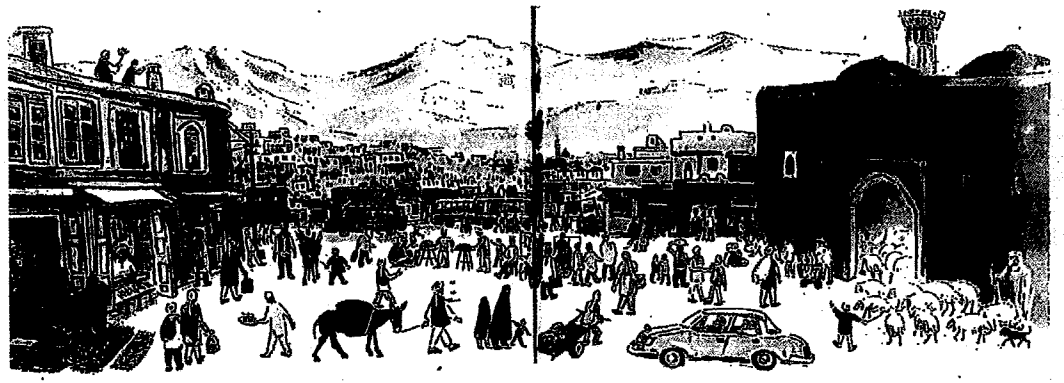
1 アジアの真ん中にアフガニスタンという国があります。めったに雨がふらないので、かわいた土とすなばかりの国のように思われています。でも、万年雪をかぶった高い山が連なり、森や見わたすかぎりの大草原もあって、春になれば花がさきみだれ、夏になれば、果物がゆたかに実る美しい自然がいっぱいの国です。

2 小さな男の子、ヤモの住むパグマンの村でも、毎年、村人たちは家族そろって、あんずや、すももや、さくらんぼをもぎ取ります。とり入れは一年中でいちばん楽しいときです。

「あんず、なったか、すもも、なったか。真っ赤な頭のさくらんぼ。取ったか、食べたか、食べずに死んだか……」

3 ヤモも、兄さんのハルーンと競争でかごいっぱいのすももやさくらんぼを取ります。村中があまいかおりに包まれます。

4 でも、今年の夏、兄さんはいません。兵隊になって、戦いに行ったのです。アフガニスタンでは、もう何年も、民族どうしの戦争が続いています。戦争は国中に広がり、わか者は次々と戦いに出かけていきました。



5 あまいすももと真っ赤なさくらんぼが、ろばのボンバーのせなかで重そうにゆれています。今日、ヤモは初めてボンバーと、町へ果物を売りに行くことになりました。兄さんの代わりに、父さんの手伝いをするのです。

6 街道は日がのぼって、急に暑くなってきました。町へ向かうバスやトラックが、ヤモたちを追いこしていきます。

7 町に着きました。羊の市も立って、にぎやかな声があっちからもこっちからも聞こえてきます。戦争なんかどこにもないみたいです。いり豆売りのおじさんが大声をはり上げています。シシカバブ（焼き肉）やパンの焼けるにおい。町のにぎわいに、ヤモはむねがどきどきします。

8 人の行きかう大きな広場で、いよいよ店開きです。

「父さんはこの広場ですももを売るから、ヤモは、町の中を回ってさくらんぼを売ってごらん。」

「ぼく、一人で？」

「ボンバーがついているさ。ボンバーは、町中知らない所はないんだから。」

9 しかたなくヤモは、ボンバーに引っぱられるようにして屋根つきバザールに行きました。色とりどりの小さな店が、所せましとならんでいます。買い物をする人。お茶を飲む人。

（こんな所で売れるかなぁ）

10 ヤモは、心配になりました。勇気を出してよんでみました。

「さくらんぼ！　パグマンのさくらんぼ！」

11 でも、だれもふり向いてくれません。ヤモは、がっかりして、道ばたにすわりこみました。すると、小さな女の子がやってきて、

「パグマンのさくらんぼ、ちょうだい！」

と言いました。ヤモはうれしくなって、うんとおまけをしてやりました。

「ぼうや、わたしにもおくれ。」

12 女の子の後ろから、足のない人が言いました。

「昔、パグマンの近くで果物を作ってたんだ。なつかしいな。」

13 ヤモは、びっくりしてたずねました。

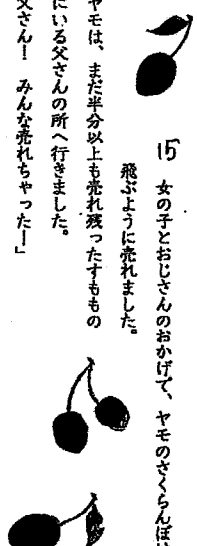
「おじさんは、戦争に行ってたの？」

「ああ、そうだよ。おかげで足をなくしてしまってね。」

14 ヤモは、どきっとしました。ハルーン兄さんの顔が思いうかびました。おじさんは、さくらんぼを口に入れると、大きな声で言いました。

「ううむ、あまくて、ちょっとすっぱくって、やっぱりおいしいなあ！　パグマンのさくらんぼは世界一だ。」

15 女の子とおじさんのおかげで、ヤモのさくらんぼは、飛ぶように売れました。



16 ヤモは、まだ半分以上も売れ残ったすももの前にいる父さんの所へ行きました。

「父さん！　みんな売れちゃった！」

「そうか！　それじゃ、ひと休みして、ご飯を食べに行こうか。」

17 父さんは、となりのおじさんに店番をたのみました。おいしそうなにおいのする チャイハナ（食堂）で、ヤモは、父さんとおそい昼ご飯を食べながら、バザールであったことを話しました。

「戦争で足をなくしたおじさんも買ってくれたんだよ。パグマンのさくらんぼは、世界一だって。父さんと食べようと思って取っといたんだ。」

18 ヤモは、ひとにぎりのさくらんぼを取り出しました。

「よく売れたようですな。」

19 となりで二人の話を聞いていたおじさんが、声をかけてきました。

「いやあ、このヤモのおかげですよ。何しろ、上のむすこが戦争に行ってましてね。」

「それは、心配ですな。南の方の戦いは、かなりひどいというし。」

「来年の春には帰ると言ってたんですがね。」

20 ヤモはお茶を飲みながら、父さんたちの話を聞いていました。ハルーン兄さんならだいじょうぶ、きっと春には元気に帰ってくると、ヤモは信じています。でも、何だかむねがいっぱいになってきました。

21 そんなヤモを見て、父さんが言いました。

「後でびっくりすることがあるよ。」

「え？　何、何。教えて。」

「さあ、その前にもうひと仕事。残りのすももを売ってしまわなくちゃ。」

22 ヤモは、最後に残ったさくらんぼを大切に食べると、おじさんにさよならを言って、チャイハナを出ました。

23 広場のモスクから、おいのりの声が流れてきます。ヤモは、すももを売りながら、ずっと父さんの言ったことを考えていました。

24 ようやく、すももも全部売れました。

「さて、それじゃあ、びっくりする所に行くとするか。」

25 父さんは、まっすぐ広場を横切っていきます。

26 そこは羊の市場でした。父さんは、もうけたお金を全部使って、真っ白な子羊を一頭買いました。ヤモのうちの初めての羊。こんなきれいな羊は、村のだれも持っていません。

「さあポンパー、家へ帰ろう。羊を見たら、きっとみんなおどろくよ。」

27 ヤモは、大喜びで村へもどってきました。たった一日いなかっただけなのに、とてもなつかしいにおいがします。

「バグマンはいいな。世界一美しいぼくの村。」

28 ヤモは、そっとつぶやきました。

「ハルーン兄さん、早く帰っておいてよ。うちの家族がふえたんだよ。」

29 ヤモは、父さんにたのんで、白い子羊に「パハール（春）」という名前をつけようと思いました。でも、春はまだ先です。

30 その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。